

**フレッド・I・グリーンスタイン 『The  
Presidential Difference : Leadership Style  
from FDR to Clinton』 (松野みどり教授 退官記念  
論文集)**

著者	ビートン アンドリュー
雑誌名	金沢法学
巻	46
号	2
ページ	A197-A210
発行年	2004-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/4428">http://hdl.handle.net/2297/4428</a>

《書評》

フレッド・I・グリーンスタイン

『*The Presidential Difference : Leadership Style from FDR to Clinton*』

アンドリュー・ビートン

序

大統領の政治的心理学を検討している多くの著作の中で、フレッド・I・グリーンスタインの *The Presidential Difference : Leadership Style from FDR to Clinton* (プリンストン大学出版、2000年) はおそらく最も包括的な内容のものだろう。確かに、大統領に影響を与える指導者としての資質についての他の研究者の著作が以前に注目を集めたこともある。例えば、リチャード・E・ニュースタッド (Richard E. Neustadt) の *Presidential Power : The Politics of Leadership* (1960年) は、広範囲に亘る政治的基盤の維持と大統領特権の拡大のために、どのような政治的手腕が用いられたかに焦点を合わせている。もう一つの大統領関連の著作として、ジェームズ・デビッド・バーバー (James David Barber) の *Presidential Character : Predicting Performance in the Whitehouse* (1972年) が挙げられるが、この本では情緒的安定及び不安定が影響を及ぼす大統領のパフォーマンスを検討している。しかし、こういった以前の研究を基礎とする一方で、著者はアメリカの大統領に影響を与える広範囲に及ぶ指導者としての資質に関心を持っているようである。本書では、11人に及ぶ戦後の大統領のケーススタディを用いて、フランクリン・ルーズベルトからビル・クリントンまでの、各人の異なるアプローチを調べて、総合的な「有効性」を評価するために、それぞれのリーダーシップスタイルを分析している。

20世紀後半の大統領のリーダーシップを考えると、著者はアメリカ大統

領の政治について、有益な報告をまとめる役として見事に適している。著者はプリンストン大学のウッドロー・ウィルソン公共政策・国際問題大学院の名誉教授であり、大統領のリーダーシップの複雑性について20年以上に及ぶ研究を続けてきた。著作としては、1985年に出版された *The Hidden-Hand Presidency* が、その独特の分析で最もよく知られており、ドワイト・アイゼンハワーの不可解な政治的スタイルの研究には欠かせない一冊となっている。アイゼンハワー、リチャード・ニクソン、ロナルド・レーガン、そして著者が直接会ったことのあるジェラルド・フォード、ジミー・カーター、クリントンという諸大統領の研究を通して、その豊富な経験を心理学と政治学の学際的研究に上手く役立てている。このような恵まれた経験により、戦後の大統領の問題点をいとも簡単に指摘してみせる。そして、同時に聡明で適切にバランスのとれた評価をしている。全体としては、大統領リーダーシップの分析は洞察力に満ちており、信頼にたるもので、著名な大統領史研究者への期待にこたえている。まさに、経験、題材に関する精通性、洞察に満ちた分析と、信頼できる評価の組み合わせが、著者の確固たる総合的な結論に信頼性を与えている。

## 本書の特長

包括的な研究範囲の広さ、そして、著者の才能を考えると、本書が注意深くまとめられているのは驚くことではない。序章では、大統領のリーダーシップという概念についての一般的な議論に続き、最も「効果的」な大統領が政治的手腕を有しているわけではない、との議論を展開している。もっと厳密に言うと、著者は大統領の公的コミュニケーション能力、組織能力、ビジョン、感情の知性など、指導者としての六つの資質を分類している。二章から十二章までは年代順に構成されており、それぞれの章で各大統領の論評が詳しくなされており、続いて著者の基準に沿って各大統領の有効性を明瞭に

評価している。この斬新な構成により、著者は大統領から大統領へと淀みなく話を進める一方、指導者としての資質の評価に集中することに成功している。それと同時に、本書は明らかに未来の大統領のための手引書として執筆されており、簡潔で、教訓的で、大変読み易い一冊に仕上がっている。その結果、著者のある結論の一部に対して異論を唱える人はいるだろうが、本書は大統領に関する歴史研究の分野において先駆的な業績であると言えるだろう。

本書の称賛に値する特徴として、著者の適度な明確さと、大統領の業績を評価するために一貫して六つの基準を利用したことが挙げられる。まず、著者は大統領の「公的コミュニケーション能力」(“public communication”)についての全体的な有効性に注目する。著者が識別したその要因は、ある程度おおまかに定義されている一方、国民と対話し、啓蒙し、その気にさせる、といった雄弁家としての大統領の才能や、マスメディア対応の才能なども含まれている。次に重要な資質として、大統領の「組織能力」(“organizational capacity”)を挙げている。著者は、ホワイトハウススタッフにやる気を起こさせる大統領の指導者としての役割や、組織構造の利用、有効な諮問機関の設置といった要素を検討し、ホワイトハウス内部の仕組みに焦点を合わせている。第三に重要な資質は、「政治的手腕」(“political skill”)であり、政治家として大統領の政治的アジェンダを推進し、望ましい成果を引き出すための、私的及び公的な駆け引きに長けているか、という点である。政治的手腕を用いるにあたって、第四の重要な資質である大統領の指導者としての「ビジョン」(“vision”)を注意深く示さなければならない。著者は、大統領の政策が実行可能で包括的な目標を保持しているかを評価しつつ、大統領の政策内容に集中する能力として、戦略的な意味合いで、ビジョンを定義している。第五に、氾濫する情報と、大統領の決断に重大な影響を与えるが過量なアドバイスの処理方法である大統領の「認識手法」(“cognitive style”)を上げている。そして、最後に、大統領の「感情の知性」(“emotional intelligence”)

を非常に重要視している。著者は感情の知性を「感情をコントロールする能力と、感情に支配されリーダーシップを失うよりもむしろ建設的な目的に変換する能力」<sup>1)</sup>として定義している。総合的に見ると、こういった基準の利用は革新的であり、これにより著者は大統領のリーダーシップについてのありふれた一般論から飛躍することができた。

二つ目の肯定的な特徴として、各章の末尾で、各大統領の共通の項目により総括していることが挙げられる。前述したように、著者は大統領の指導者としての資質に関する議論の中で、様々な具体的な要因を特定している。その要因を復習して、各章の終わりに大統領の資質についての判断を効果的に描写しており、これらの資質について、各大統領の長所と短所を詳細に評価している。例えば、著者によると、アイゼンハワーのコミュニケーション能力については、アイゼンハワーが雄弁家ではなく、説得力も弱かったため、評価が低くて当然である、としている。この分析的アプローチにより、大統領のリーダーシップの成功と失敗の識別を実現した。かくして、著者はアイゼンハワーには、他の全ての資質において高い評価がふさわしいと考えているが、コミュニケーション能力に関しては、「最も魅力がない指導者としての資質」であると冷静に推論している。また、他の章でも同様に冷静な判断を下しているところに惹きつけられる。例えば、ジョージ・H・W・ブッシュ（以下ブッシュ・シニア）については、たいした雄弁家ではないにもかかわらず、高い支持率を得ていた、と指摘している。同様に、クリントンについても、知的ではあるが、性格に欠点があり、「劣等生で、アメリカの恥」(“an underachiever and a national embarrassment”)と結論付けている。こうした強気の分析が示すように、事実で満たされバランスが取れた要約をしている。

もう一つの推奨できる特徴としては、最終章での成熟した結論が挙げられる。「戦後の大統領からの教訓」と題されたこの章では、各大統領について手短かに述べ、大統領の資質についての論議をさらに膨らませ、比較の文脈の中で大統領を評価している。著者は、ルーズベルト、ケネディ、レーガン、

クリントンのコミュニケーション能力が優秀であると評価しているが、4人とも生まれつき雄弁であったわけではなく、その技能は努力して身につけたものだと説明している。さらに、組織能力に関しては、チーム作りが得意ではないジョンソン、ニクソン、カーター、クリントンに低い評価を与えているのに対して、アイゼンハワーの「効果的な組織編制能力」(“capacity to design effective institutional arrangements”)には、並外れて高い評価を与えている。認識能力の評価では、アイゼンハワーとニクソンの戦略的な能力に最も良い印象を持っており、カーターは、木を見て森を見ない傾向にあることから、悪い印象を持たれている。興味深いことに、レーガンとトルーマンは重要な業績を残したにもかかわらず、前者は詳細の理解力が、後者は歴史の逸話的理解力が乏しいとして、両者とも認識能力が限られていると判断されている。

大統領のビジョンに関しては、アイゼンハワーとニクソンが、重ねて良い印象を持たれており、次いでレーガンが続くが、レーガンのビジョンについてはいくらか曖昧で、「具体的な根拠はない」(“ungrounded in specifics”)としている。しかし、大統領の中でも本物のビジョンを持つ者は「まれ」であると著者は失望しており、特に「戦術的な動き」のブッシュ・シニアとトルーマンについては、かなり厳しく批判している。政治手腕の話になると、当然のことながら、著者はジョンソンの政治的駆け引きと巧みな大統領権限の利用を褒め称え、そして、僅差でルーズベルトの「絶妙な」(“superb”)政治手腕を認めている。最後の感情の知性に関しては、ジョンソン、ニクソン、カーター、クリントンの4人が様々な理由から「知的障害」に当てはまると主張し、11人の大統領のうち、アイゼンハワー、フォード、ブッシュ・シニアの3人にのみ、好意的な評価を与えている。このように、ほとんどの場合、大統領の長所と短所を評価し、理路整然とした分析を提供している。しかも、本書は参考書としても役に立つ。付録には、各大統領の経歴、大統領選挙の結果、議会内の力関係、副大統領や閣僚、最高裁判官の選任、主要な出来事

の概要や重要な日付など、役に立つ表が付されている。さらには、本書で検討された各大統領に関連した大統領史家の主な著作の概略が幾つか簡単に紹介されているのも好都合である。こういった理由から、アメリカの大統領の成功と失敗を評価している本書は、多くの知識を与えてくれる卓越した入門書である。

## 問題点

そうはいつても、このように優れた著作であっても、望まれる点がなくはない。まず、各章の中で、著者のデータの利用に起因する幾つかの基本的な問題がある。大統領の文書を見直してみると、議論する際のデータは、著者が独断に基づいて選択しているように思える。大統領の業績をたどると、その大統領を理解するために最も中心的な事柄であると著者が考えているトピックを選択している様に見える。しかし、そのトピックを利用するか、または、排除するかの方法論については、序章では明確に説明されていない。指導者としての資質について論じている時に、ベトナムについて論じると、著者の意図が分からなくなる読者もいるのではないだろうか。例えば、それぞれの大統領のベトナムに関する対処法がどのように違うかを論じる際に、著者はアイゼンハワーが戦略的ビジョンによってアメリカの関与が拡大することを防いだと長々と語り、1963年に南ベトナム大統領ゴ・ディン・ディエムの打倒を支持したケネディの決定に関しては、その組織能力の不味さについては多くを語っていないが、1965年にアメリカの関与の増大をもたらしたジョンソンの戦術的な対応については批判している。アイゼンハワーの相対的に成功した政策は、しっかりと主張され、ベトナム問題は明らかに重要ではない出来事であり、ケネディにとっても同様に解釈され、ジョンソンにとっては重要だったというのが著者の結論である。多くの研究者が指摘するように、SEATO（東南アジア条約機構）などの軍事条約により、アメリカのグ

ローバル・コミットメントが劇的に増加し、アジア地域への関与が高まったのは、アイゼンハワー政権時代からである。1960年初めに、ケネディはベトナムの軍事顧問の数を急激に増やし、インドシナにおけるアメリカの利害が膨らむ結果となった。確かに、ジョンソンの戦争拡大がベトナムを中心問題化させたと主張することもできるが、ジョンソンはアイゼンハワーとケネディから、それよりも深刻な状態でベトナム問題を引き継いでいる。明確な客観的基準がなければ、著者が都合よく証拠を選択しているかのように見える。

これに関連する問題の一つとして、著者の大統領評価に当てはまらない資料については、省略する傾向にあることが挙げられる。前述のように、アイゼンハワーの政治力及び「戦略的なビジョン」(“strategic vision”)を非常に高く評価しているのに対して、ブッシュ・シニアの戦術的な動きに関しては「ビジョンなしのリーダーシップ」であると主張し、「意図的でない結果を導いた政策」(“policies that have unintended consequences”)と主張している。アイゼンハワーが戦略的な計画に長けており、ほとんどの場合、ソ連の脅威に上手く対処していたという点には賛成ではあるが、1960年5月のU-2機墜撃事件の失策については、本書では触れていない。当初アイゼンハワーが下した、ソ連領空を飛行したというU-2偵察機の存在を否定するという決断と、アメリカ人パイロットの存在を否定し、アメリカ国民と国際社会を欺こうとした事実は、ばつが悪いという言葉だけで片付けられるものではない。フルシチョフ書記長がテレビに同パイロットを出演させた後、アメリカは、国際的信用性を弱めることとなった。さらに、フルシチョフは予定されていた1960年のパリ首脳会談への参加も取りやめ、結果として首脳会談を流してしまい、アイゼンハワーが苦勞して築いてきたデタント時代はあっけなく挫折を迎える。かくして、U-2機事件の「意図的でない結果を導いた政策」が、米ソ関係の冷却をもたらした。こうした米ソ関係を大きく後退させた出来事には触れずに、アイゼンハワーの戦略的な特質を褒め称えていると



いうことは、著者がアイゼンハワーのリーダーシップをいくらか過大評価しているという意味ではないだろうか。

反対に、ブッシュ・シニアの外交政策については、例外である湾岸戦争を取り上げ、ブッシュをやや「受動的」で、かなり「状況対応的」とであると論じ、全体的にブッシュは「目立った業績に欠けている」と結論付けている。この点に関しては、著者はブッシュの世界的ビジョンを過小評価しているようである。というのは、ブッシュは、ヨーロッパにおける、ソ連及びヨーロッパの統合、そしてドイツの統一を推進するための、十分グローバルな観点を持ち合わせていたからである。それを証明するように、1989年5月には、テキサス A&M 大学での対ソ連外交政策に関する講演の中で、「アメリカは今、ソ連の拡大主義をただ牽制するだけでなく、もっと大きな目標を持っている。我々はソ連の国際社会への参加を求める」ので「封じ込め政策を越えて前進する時だ」と言明している。ブッシュ・シニアは前向きな政治的変化に対して、時として過剰なほど注意深く対応していたが、アメリカは流動的な時期にブッシュ・シニアのリーダーシップの下で、一貫して国際社会の安定を追求してきた。

アジアについては、本書の至る所で間接的に議論されているが、著者はブッシュ・シニアが対中、対日関係を上手くマネージしたことについては一切述べていない。1989年6月の天安門事件直後の、中国政府に対するアメリカ国民の激しい怒りは、忘れられない。この激烈なアメリカの世論や議会からの圧力にもかかわらず、ブッシュ・シニアは中国に対して孤立主義政策を採用することを拒否した。そして、中米関係の非常に重要なこの時期に、中国との対話を維持するために、ブッシュ・シニアは、ブレント・スコウクロフト大統領補佐官（国家安全保障担当）、そしてラリー・イーグルバーガー国務副長官を内密に中国に派遣した。日米関係も同様に、米国内外の保護主義者に対抗し、米国の不景気の間も変わらず議会の「日本たたき」論者に対して断固とした態度を取り、概して日米協調関係をうまく維持した。著者はブ

ブッシュ・シニアの外交技量を認識してはいるものの、ブッシュ・シニアの成功の秘訣が世界的ビジョンによるものであるということを正当に評価していない。

前述のアイゼンハワーの分析とブッシュ・シニア政権の外交政策に関する記述が実証するように、著者のアイゼンハワーの戦略的才能に関する議論とブッシュ・シニアの戦術的リーダーシップに関する議論は単純化されすぎており、結論は誇張されている。従って、著者が矛盾に適切に取り組みながら、より陰影のある議論を展開していれば、各大統領の評価がもっと正確なものになっていたであろう。

本書の魅力的な特徴は、簡潔さであるものの、詳細に亘って説明していれば読者にとってさらに有益であったであろう。例えば、著者は、トルーマン大統領の原子爆弾投下に関する決定をめぐり、次のように簡潔に要約している。

「評論家は、トルーマンが原子爆弾を使用したのは日本を打ち負かすためというよりも、ソ連を牽制するためだった、と主張している。しかし、[大統領の]文書によると、トルーマンはルーズベルトから継承した政策を採用していたことが明らかになっている。ルーズベルトの顧問は、どのように原爆を使用するかに関しては、意見が分かれていたが、使用するかどうかは問題としていなかった。マンハッタン計画の責任者が言及したように、トルーマンが核兵器を使用したのは『現行の計画を狂わせないため』であった。」<sup>3</sup>

著者の結論に異議を唱えるつもりはないが、大統領関係の文書について触れているにもかかわらず、文書の内容を証拠として一切利用しておらず、議論に盛り込んでいないことが気にかかった。さらに、複雑な問題については、歴史的議論を認識せずに著者の判断で言い逃れていると言う印象を持った。専門家であれば、著者のような適任の学者には、政策決定過程における決定者としての大統領の資質に重点を置いて、もっと詳細に亘って説明してもら

いたかったと思うだろう。さらに、歴史的な論争に関して、もっと徹底的に解明していれば、予備知識のない読者にとっても有益なものとなっていたかもしれない。フォードやブッシュ・シニアなど、任期を一期しか務めなかった大統領の論評には、著者の簡潔さがよく表れている。こういった意味で、もう少し詳細に解明していれば、より学術的な価値の高い一冊に仕上がっていただろう。

本書の次に大きな問題点は、比較項目を選択する際の明確な理論的根拠の欠如である。著者がアイゼンハワーに好意的なのは明確であり、他の大統領と比較する際に、時として、アイゼンハワーと共にルーズベルトを基準にしているように思える。実際、戦略的ビジョンを優先的に考慮していることから、著者が選択した資質は、アイゼンハワーが高く評価される結果となる傾向にあると感じる読者もいるだろう。さらには、議論される際に基準が包括的であるか選択された項目なのかは明確ではないため、リーダーシップのその他の側面が省略されたかどうかについては読者の判断に任されている。例えば、避けられている話題である、大統領の「道徳的リーダーシップ」の有無についての議論であれば、クリントンの比較的控えめである業績を説明するのに役に立つことだろう。クリントンの心理的欠陥の詳細な解説に興味のある読者には、スタンレー・A・レンション (Stanley A. Renshon) の *High Hopes and the Politics of Ambition* (New York University Press, 1996年) も面白いだろう。著者は誰でもが議論するテーマを選択するにあたってそれなりの判断力をもっているが、なぜこの六つの基準が議論の中心になるのかについて、もっと詳細に理論的な説明があれば、有用であっただろう。

もう一つの問題は、限定された数の要素だけが六つの基準に関連して議論されているため、各章によって分析が微妙に矛盾していることである。既に指摘したように、著者は、それぞれの章で指導者としての大統領の、明確に定義された六つの資質に焦点を合わせながら、大統領のリーダーシップを検討している。しかし、それぞれの比較項目内の要因は、ある程度あやふやに

定義されているため、議論の中心は大統領によって違って来る。それ故、例えばフォードの政治的手腕を検討する際に、著者は「フォードは野党支配の議会と対決する最高責任者として、大統領権限である手段を直ちに採用し、大統領拒否権の真価を発揮した」と結論付けている。これに関しては、フォードとブッシュ・シニアの状況は非常に似通っており、ブッシュ・シニアは拒否権を発動し、野党支配の議会と戦い、大統領権限の侵害に対する保護には非常に慎重でもあった。しかし、ブッシュ・シニアに対する評価では、著者はこれらの要因については全く取り上げておらず、ブッシュ・シニアの政治的手腕を、戦略的というよりも「戦術的」として、それ以上の細かい議論は展開していない。序章での比較項目内で関連のある要因を定義する際に、正確さが欠如しているため、著者が議論に都合の良いものだけを選ぶ結果となっている。従って、複数の大統領をあらゆる要因により、指導者としての資質を比較分析したいという読者には、大統領によってカバーされている範囲に差異がある本書の利用価値は限定されるだろう。

最後の問題点は、本書の最終章で著者の最終的な結論がどのように導かれるか、という点である。前述のように、各大統領の最初の概説に特定のトピックを利用するか、または排除するかという点について、著者は明確な客観的基準を持っていない。さらに、それぞれの大統領についての一般的な議論に続いて、大統領のリーダーシップに関する諸要因がまとめられており、著者の概説と評価は分けられている。時として、この統合が欠如しているため、その結果生じた評価とそれ以前に行われた議論の正確な関係は読者の解釈に任される結果となる。同様に最終章で、指導者の資質であるそれぞれの基準と著者の主張を復習する際にも、評価は完全に客観的基準に基づいたものではない。むしろ、比較項目内で議論のための要因が、再度、ある程度独断で選択されている。この問題は、著者の各大統領に関する評価を否定するものではないが、議論の説得力を弱めてしまうと言えるだろう。

結論で、時として著者はある特定の基準に関してランク付けをしている

が、そこでは著者の本領を発揮している。例えば、感情の知性に関して評価する際、「精神的苦悩」を理由にニクソンに、そして、「だらしない」(“the undisciplined”) クリントンとに対して最低点を与えている。しかし、そもそもレッテルを貼ることを避けるために基準を考案したため、最終的に全ての大統領を比較してランク付けしようとしているわけではない。おそらく著者の研究の裏側では、それぞれの基準ごとに各大統領の総合的有効性が明確にランク付けされていることは間違いなく、刺激的な結論を生み出しているのだろう。

2000年に出版された本書の惜しまれる点は、ジョージ・W・ブッシュ（以下、ブッシュ・ジュニア）政権を取り入れていないことである。この問題を修正するため、2001年にペーパーバック版が出版された際、ブッシュ・ジュニアの予備的評価を後に盛り込んだ。ブッシュ・ジュニア政権のイラク侵攻に対する断固として否定的なマスメディアの対応を考えると、初期の評価としては、明らかに前向きで、爽快にバランスが取れたものであった。今のところ著者は、ブッシュ・ジュニアの政治的手腕、ビジョン、感情の知性については、評論家の批判にもかかわらず、思っていたよりも優れていると認めている。しかし、9月11日以前のこの所見は予想できるけれども、9.11が大統領の決定にどのように影響するかは著者は予期できなかっただろう。それ故、この議論は不十分であるが、幸運なことに、*The Presidential Difference: Leadership Style from FDR to George W. Bush*（大統領の相違点：ルーズベルトからブッシュ・ジュニアまで）の第二版が2004年4月にプリンストン大学出版より刊行される予定である。ブッシュ・ジュニア政権の詳細な評価を期待して待っている読者は、*The George W. Bush Presidency: An Early Assessment*（Johns Hopkins University Press, 2003年）を著者が編集しているので、とりあえずそちらを読むといい。

## 結語

総括すると、本書は大統領研究の分野では、画期的な作品であり、複雑な大統領のリーダーシップに興味のある読者にとっては、必読の一冊である。大統領の指導力を評価するために、合理的・理論的枠組み及び大統領の指導者としての資質を分類し、効率よく組み合わせたことは、特筆すべき点である。それぞれの章において、興味深い逸話と洞察に満ちた分析に溢れ、バランスの良い熟考した結論を導いている。確かに、問題の方法論に起因する著者の結論に対して異義を唱えることはできる。先に述べたように、時として著者のデータの利用には問題があり、特に独断によるデータの選択と省略、明瞭さの欠如といった問題は、もちろんある。構成要素を選択する際の客観的基準がないため、項目ごとの評価に矛盾を生じさせている。しかし、あらゆる点を考慮すると、本書は包括的な範囲及び簡潔な記述、比較的正確な大統領のプロファイルの集大成を読者に提供している。これらの理由により、大統領の指導力の有効性を検討する際、著者が我々の戦後のアメリカ大統領に関する理解を深めるといふ、重要な貢献をしたことは明らかである。

## 注

- <sup>1</sup> Fred I. Greenstein, *The Presidential Difference: Leadership Style from FDR to Clinton*, (New Jersey: Princeton University, 2000), p.6. 原文では、“The president’s ability to manage his emotions and turn them into constructive purposes, rather than being dominated by them and allowing them to diminish his leadership.”となっている。
- <sup>2</sup> Remarks by the President at Texas A&M University, May 12, 1989, folder “Foreign Policy Speeches 4/89–2/90,” OA/ID 6791, Alpha Files, Marlin Fitzwater Files, White House Press Office, George Bush Presidential Records. 原文では、“It is time to move beyond containment” as “the United States now has as its goal much more than simply containing Soviet expansionism. We seek the integration of the Soviet Union into the community of nations.”となっている。
- <sup>3</sup> Fred I. Greenstein, *The Presidential Difference: Leadership Style from FDR to Clinton*, (New Jersey: Princeton University, 2000), p.33

- <sup>4</sup> Ibid., p.123. 原文では、“Ford also adopted readily to the instruments of presidential power, demonstrating the value of the veto as a chief executive faced with a Congress dominated by the opposition party.”となっている。